essais こころみ　2025年4月

2025年4月1日（火）　曇

新年度が始まった。天気は曇だけど、4月の声が晴々しい。環境のかわった人は落ち着くまでひと月はかかわる。途中でいや気がさすのはよくあること、気をとり直してやりすごすと、案外居心地よい場合あり。

―　学びはうそをつかない　（４）　－

『自分を教える』　④

よくもわるくも学びはうそをつかない。ときに自分の未熟さに呆れることがある。やさしく指摘されて、ハッとして、自分を省みる。この姿勢をなくすと、たぶん、遅かれ早かれ、自分の道もとだえる。

日常の中に哲学がある。そう実感したのは事務所開設から１年ほどのことだった。事務所の当方のパソコンを、友人が来て独り占めする。仕事の準備に追われ、焦っているのは理解できる。

しばらく黙ってみていた。見られていると気づいているのに、離れない。“いざという時には、自分のことしか考えない人だ…”。普段は人なつっこく、当所に頻繁に出入りしていた。

人となりがわかったことがあるのかもしれない。本人がパソコンから離れるまで何を言わなかったのは。苦々しい気持ちはあった。でも案外冷静に、“日常の中に自分を試される場面があるなぁ…”と感じていた。

“日常の中に哲学がある…”。そう頭に浮かんだ瞬間のシチュエーションは今もはっきりと憶えている。「モンテーニュ」の『エセー』を知ったのはこの5年後だけど、「自分を観察する」意識の芽生えだったか。

同じ社会に住んでいても、住む世界は異なる。生活文化、流儀、不文律がちがう。違いがわるいわけではないので、互いの世界を尊重して、関係は絶った。そうするほどのことも別にあった。

事務所開設当初3年は、自分を試される、その分、自分を教える前期になった。「安定」からは得られないものを得たと思う。

2025年4月4日（金）清明　晴れ

大阪市内でも桜はほぼ満開。今日の日中からそこかしこで春の宴が催されそう。この週末が見頃、気温も２０℃前後の予報。絶好の花日和。

―　学びはうそをつかない　（４）　－

『自分を教える』　⑤

2022年8月8日に、ふとその気になり『老子』の音読を始めた。本は４年前にちょっとしたきっかけで2冊訳者別で買ってあった。

いつか読むタイミングがくるだろうとそのままにしてあったが、その時がきた。数日後に知ったのだが、その日は中井久夫先生が他界された日だった。

『老子』は最初の音読から４回再読した。左記に案内しているように、『孫子』、『モンテーニュ』再読へと音読の習慣がすっかりついた。サイトにアップすることで一定の緊張感ももてた。

かれこれ3年、何ごともよしあしが見え始め、気づく頃。「岡潔」ほどの「宗教によって境地が進んだ結果、ものが非常に見えやすくなったという感じ｜ まではいかないにしろ、すこしは通じる。

3年前の読み始めの時に音読の意義・効果は、今ははっきり見えないと自分で語っている。それは追って見えてくると話している。

知的文化遺産に継続的にふれながら、知的に変らないなんて、あり得ない。好感するにしろ、否定的にしろ、認識を何かしら更新する。

“ちょっと冴えてきたなぁ…”。先日そう感じる瞬間があった。「冴え」は一時的だろうけど、自分でそう思えた。なかなか愉快な感触、感覚だった、顔がほころんだ。

同時に「学び」の意義を実感できた感じがした。大事さは重々わかっているつもりだけど、心の底からじわっとわかる感じだった。

だから今さらながら、「学び」を大切にしようと肝に銘じた。あえて意識するようにしようと自分に言い聞かせた。

「学び」の再発見。事務所開設から31年目に入るこの4月に、この境地に立てたのはよかった。

「前へ進むのに謙虚さでいく人と理想追求でいく人があるとすれば」（岡潔）、前者でありたいと思う。

2025年4月6日（日）　　絶好の桜見日和、近くの公園へ

2025年4月7日（月）　晴れ

5、6日の土日は絶好の桜見日和だった。近くの小さな公園で小一時間昼ごはん飲みをした。周縁と中央の桜がほぼ満開。いつもより人は多かったけど、ゆったり愉しめた。今は近場がいい。

―　「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』か－　（１）

『直感から直観へのリレー』　①

２月のリーズレター立春に書いた「印象」と「閃き」、せっかくだからこの機会にもうすこし考えてみよう。

「印象」に注目するようになったのは事務所をもってから。自宅事務所の間はそれほど気にとめていなかった。事務所を開設したことで友人知人たちが、自分の友人知人に、「こんな人がいる」を話し、ときには一緒に訪ねてきた。

もともと人の話はよく聴くほうだし、自分もしっかり話す。話題に応じて対話が進み、発展する。個人的にそれはごく自然なコミュニケーションスタイル、LYK流パーソナル・アシスタントの役割の一つと考えていた。もちろん今もそう。

そうした対話をいろいろな人と交わすことになったおかげで、えっ、そうっだたの？と今さらながら一般社会の不文律を知ることになった。「普通はそんな風にしませんよ、考えませんよ」と何度となく聞いたのだ。

そうすると自ずと自分に問うようになる、なぜそういうことがわからずに来たのか、どのようにして今の自分ができたのか。視線と思考が過去をたどることになった。

そこで思い出されるのが、うんと時間は経っているのに、鮮明に、感覚までも憶えている過去の出来事、場面。そこに手がかりがあった。